

【評 論】

コロナ禍を哲学する  
—— M・ハイデガーの死の先駆的決意性からの考察 ——

上江洲 基

Thinking about COVID-19 Philosophically  
—— A Consideration of the Anticipatory Resoluteness of Death ——

UEZU Hajime

今回のコロナ禍で世界の多くの人々がお亡くなりになりました。心から哀悼の意を表します。また、今なおその渦中にある方々の一日も早い復帰をお祈り申し上げます。この“人類を死に至らしめる未知のウイルス”は、日本国内のみならず、特に欧米諸国で今なお勢力を弱めることなく猛威をふるっています。

我々はただそのウイルスに感染する事を恐れ戦々恐々とするだけの消極的な生き方で日々を送るだけの生活の仕方での良いのでしょうか。むしろこれらの不安をバネにして、一人でも多くの方々が実存的思考に目覚め、人間本来の生き方を取り戻し、新しい人生観を構築することに励むことが出来たらと思います。そのために何をどの様に考え、どの様に実践したら良いかと言う事をこの小論において述べてみようと思います。

I.“感染症100年周期説”を如何に考え乗り切るか？

今から約100年前の1920年のスペイン風邪で有名なマックス・ウエーバーが肺炎で亡くなった事は有名な話であり、実に惜しまれる事である。またそれよりも100年前の1820年前後にコレラが世界で猛威を振るい、更に、その100年前の1720年には、フランスでペストが大流行して多くの人命が奪われた。これが俗に言う「感染症100年周期説」である。

その様な歴史の史実を知る者は、1920年からの100年目の今年2020年には何かが起こるのではないかと言う不安を密かに抱いていた。それは、東北・関東を中心に日本全国で、しばしば発生している不気味な連続地震を引き金に南海トラフ地震のような、地震災害が発生するのではないかと戦々恐々としていた。しかしながら、その予想は大きく外れた。それは、未知の新型コロナウイルス

スの到来であった。

科学技術の発達した今日、まさか嘗て世界を震撼させた感染症（サーズ）に引き続き人類が再度、この様なウイルスに襲われるとは誰が予想したであろうか。

この新型コロナウイルスは、年末を迎えんとする現在も、世界の各地で猛威を振るい、日常生活に多大なる被害を与え続けている。特にフランスは第2回目のロックダウン（都市封鎖）が発令され大きな混乱に見舞われている。

余談ではあるが、ニュース等で各国のその現状が報道されるごとに、同じ災禍に遭遇していても、国によってそれに対する考え方やその対応に大きな違いがある事を目の当たりにする。それに対する公衆衛生上の見解や思想、更に具体的な考え方、対策等の様々な差異について各国の文化の違い等に興味深い点が多々あるが、それらのことについては割愛する。

この様な“人類を死に至らしめる未知のウイルス”が全世界を恐怖に巻き込んでいる今日、多くの人々はこの皮肉にもグローバルなウイルスに対して、自分は感染しないように、日常の行動を慎重に送り、そのウイルスの勢力が衰えるのを待つだけの生活の仕方ですら果して良いのだろうか。

そのウイルスの正体が新型で未知であるが故に、世界は戦々恐々としているのは仕方のないことではあるが、ただ現実を傍観するだけでなく、これまでの100年毎の過去の感染症の時代と今日の時代の相違点を比較検討して、この時代を出来るだけ善く生きぬくために哲学に何が出来るかを述べてみたい。

## II. 今回のコロナ禍と1920年と更にそれ以前の感染症に対する各人の態度

“死”を自己の問題としてとらえる

100年前の1920年代前後に発生した、スペイン風邪やそれ以前に100年毎に猛威を振るったと言われるそれぞれの感染症の時代と今日の我々の置かれている社会的環境の一番の違いは“交通網の変化”である。今日は交通手段の発達により、数時間で世界の様々な場所への移動が可能になった。人の移動のみならず、物資・情報が容易に多くの人々の手に届くようになった。100年前には想像すら出来なかった事であろう。しかしながら便利な反面、不具合が生じる事は世の常である。それが今回の“新型コロナウイルス”の蔓延である。中国を起点に瞬く間に世界に飛び火して、世界を混乱させた。

100年前のスペイン風邪やそれ以前のコレラ・ペストの時代には、それらに関する情報は入っても、直接的にそのウイルスの発症した地域以外の人々には“対岸の火事”の様なものであった。しかし、今回は皮肉にも交通網が発達して便利になったマイナスの面が世界各地で表面化した。ウイルス保菌者が世界各地に飛び回った結果、その移動先に多くの感染者を出してしまった。その為、嘗ての様に世界各国は他人事では済ますことが出来ない事態に直面している。

個々人にしても、感染する事は他人事ではなく、“明日は我が身”であり、自己の問題として考えざるを得ない状況に直面している。言い換えれば“自分も感染して死に至るかもしれない”，と言う死への恐怖に晒された、一種の極限状況に追い込まれていると言う事である。

## III. 《コロナ禍は悪いことばかりではない、自己の本来の固有性を取り戻すチャンスである、禍を転じて福と為す》

上述では、社会が便利になった反面、それに相反するマイナスの部分が出現する事を述べた。世界の人々は、蔓延し続けるコロナ禍に自分が襲われるかも知れない、という恐怖心から逃れる事が出来ない日常に直面している。“人を死に至らしめる未知のウイルス”が日常に存在する限り、自分も感染していつ死ぬか分からないという不安に襲われて、コロナ禍以前とは違う日常生活の変更を余儀なくされている。

特に戦後生まれの多くの者にとって、このような事態は生まれて初めて経験することであろう。ステイホームを強いられた時期には、今まで当たり前のことであり、特に意識したこと無かった、“普通・平凡”な生活がこんなにも懐かしく、感謝すべきものであったのかという

反省の思いに駆られコロナ禍以前の普通の生活を多くの人が回顧した事は記憶に新しい。その様に人間は究極状況に遭遇して初めて今迄の自己の生き方を内省してこれまでの生活の怠惰を顧みるきっかけになると同時に自分の限界を実感するのである。

“人は極限状況に立たされた時に実存に目覚める”これはヤスパースの言葉である。極限状況とは自分ではどうしようもないギリギリの状況である。ではこの実存的状況ということをもっと詳しく説明すると、今ここにいる私が“自己の本来の在り方”に目覚める、換言すれば、見失ってしまっている自己の本来の在り方を模索し始めるということである。

今日の世界を恐怖に巻き込み、人を死に至らしめる未知のウイルスの恐怖に怯えながらも、これを機に“ヒト”が本来の人間に目覚める契機になれば、多大なるリスクを伴ってはいるが、悪いことばかりでは無いのではないかと考える。

そのことは、“人間は何故生きるのか”“人生とは何か”等の哲学的テーマを暗に示唆するものである。もっと平易で別な言い方にすると“コロナ禍のお蔭で見えていなかった所が見えてきた”“コロナ禍のお蔭で新しい自分を発見した”具体的には“人の優しさ・情け・慈悲”を感じる事が出来た。などの感想は、コロナ禍の非日常性がもたらした恩恵であると考えられる事が出来る。

このコロナ禍を生きる我々は、毎日、テレビ・ラジオの報道で「今日の感染者の状況」を見聞きして「明日は我が身か？」と、どうしても“死”を意識せざるを得ない日々の暮らしの下に立たされている。先程のヤスパースの限界状況に立たされ、これまでの自己の生活のあり方を見直す必要性が要求されていると言える。

未だ治療法の確立できない、未知のウイルスと遭遇している今日の我々は、誰もが死と向き合っていると言っても過言ではない。これまで「死」を他人事と考えていた者にとって、コロナ禍により「死」を自分の事として考えるようになった。実存哲学で言う所の“死を自己の問題として引き受ける”と言う事である。この時点から我々はハイデガー哲学で言う実存哲学者に変身したと言える。

## IV. ハイデガーの《死の先駆的決意性》について

「死の先駆的決意性」とはハイデガーの実存主義哲学で必ず使用される概念（言葉）であるが、しかしながら、今日のコロナ禍の真只中にいる我々にとっては、特別な事ではない。

コロナウイルスが蔓延する今日の世界に生きる者達は

一人の例外もなく全員が「死」に直面していると言える存在である。

しかしいくらそのような環境下にあっても自ら積極的に「死」を意識しなければ、ハイデガー哲学とは程遠いただのヒト (das Mann ダスマン) になってしまう。つまり自分の未来に不安をもたずに自己を見失ってただ毎日ダラダラと生きている (頹落) 人間のことである。ハイデガーはこの様な「自分本来の固有性」を失った「交換可能」な人間を「ヒト」と呼ぶ。

それでは「自分本来の固有性」を持つとはどういう事であろうか。人間にとって最大の不安とは「自分自身が死んでしまう」と言う事であろう。人間である限り将来必ず死ぬと言う事は確実な事であり、他者に頼む事のできない「代替不可能」な事実である。

そこでハイデガーは、人間は自分の死に対して自覚的になることで「自分本来の固有性」を取り戻すことが出来るとしていて、自分は将来必ず死ぬというこの可能性を積極的にひきうけ、自分が有限な存在としてより善く生きて行こうとすることで《死の先駆的決意性》を決意する事で、そこに「固有で本来的な自己のあり方」があると説明している。

簡単に言えば、人間はいつか死ぬのであるから、無駄に生きてはいけないう事を強く自覚して自分の人生を見直し、これからは充実した生活を目指そうと決意して生きることである。そのことは「死」と言うことを自覚する事によってしか生まれない決意である。

換言すれば、今日のコロナ禍によって「自分も感染して死んでしまうのではないかと」と言う不安は、否が応でも「死」を意識せざるを得ない不安を呼び寄せる。その故に誰でも実存哲学者になれる可能性があると言える。

ただ、「死」に怯えるだけでなく、「死」に「先駆けて」今ある生をより善い価値あるものにしたいと言う決意が無ければ実存的な生き方とは言い難い。

しかしながら、残念なことに毎日のように報道されるコロナ禍に関する報道特集や特別番組等では、この様な事は一切話題に上る事は無い。「店の売り上げが落ち込んだ」「経済が大変だ」云々……。全てが経済に関する即物的な事ばかりである。

この様な状況下では精神的にどの様に考え、何を支えに生きるべきであるか等のことは一切話題にのぼることは無い。まるで人間の生き方の質には興味が無いようである。「衣食住」が足りさえすれば、人生全てが上手く行くとの思想であろう。

その様な考え方に対して、佐伯啓思氏の『経済成長主義への決別』が参考になる。その中で「それ (経済成長) がもっとも大切なことと考えている限り私たちに幸せは

やって来ないのだ」と言うテーマで論じられていて、経済成長を第一義的な価値とする今日の世界的な価値観に警鐘を鳴らしている。(新潮選書2017年)

また『聖書』『論語』にも多数その様な聖句が戒めとして散見されるがその事は、別の機会に述べる事にしたと思う。

## V. 死を宣言された場合の日本人の死生観

死生観の研究は汗牛充棟であろうが、ここでは鷺田小彌太氏の研究を紹介したい。

鷺田小彌太が『図解雑学倫理』中で「一週間後に死ぬとわかったら、どうするか？」(p140) という人の死へのさまざまな反応を、次の様に紹介している。

- ①「限られた時間。有効に使う努力を尽くそう」(努力型)
- ②「どうせ死ぬなら、何をしても仕方がない」(諦観型)
- ③「やりたかったこと、できなかったことに挑戦」(冒険型)
- ④「やりたい放題やる」(破滅型)

と分析していて、鷺田氏自身は「特別なことをしないで、いつもと同じペースで仕事をする」と述べている。この考え方は、日常生活の中で、与えられた仕事があり、自分の為すべき仕事は明確に可視化されている人に言える場合のことであろう。

また、彼は「突然、死に襲われ、人生が終わっても、それまでの人生が一生だということです。一週間後であろうが、一年後であろうが、本質は同じではないでしょうか？ さまざまな思いを抱いたとしても、現実には立ちかえり、自分のいる場で力を尽くす。これが一番スムーズな生き方に思えます」

(ママ)『図解雑学倫理』(2005年140頁)

この様な考え方は、今現在、自分の仕事は明確であり、また、その仕事を自分の使命であると深く認識している人のみに許された人生観ではあるまいか。

事実、多くの人々は普通に仕事をしている。しかしながら、健康診断等で、残りの人生の時間を告げられた場合、果して鷺田氏のように自分の死を受け止める事が出来るであろうか、おおいに疑問である。それは、現在の自分の仕事をどの様に認識しているかと言う事で変わってくると思う。

ここでは①の「限られた時間。有効に使う努力を尽くそう」(努力型)の真面目な日本人の死生観にハイデガー哲学の「先駆的決意性」を取り入れて自分の生活を見つめ直す事を、勧めるものである。

ハイデガー哲学で指摘されるまでもなく現在を生きる多くの人間は生きていながらもその本当の意味を問うこ

とを忘れていた。その為には自分の「死」を認識することから始まるが、その不安を隠蔽しながら、日々を送っている。或いは意識しているがその不安を敢えて誤魔化しながら日々を送っている。

生きるとは「生活」する事である。「生」も「活」も共に「生きる」と訓ずる。しかし同じ「いきる」ではあるが、その質が明確に異なっている事を指摘したのは小児科医でありながら親鸞聖人研究者の志慶真文雄氏の著作『如来のまなざしの中を』に詳しい。

「生きる」は現実生活に必要な「衣食住」を獲得するための日常の営みである。それに比べて「生きる」は物質的な追求ではなく、目には見えにくい「善く生きる」或いは「自己の本来の生き方」の追及でなければならぬと主張されている。

## VI. 「思想の日常化」・「確率論的人生観からの脱出」

これまで、このコロナ禍に際して、我々はただ恐れるだけでなく、この際「死」と正面から向き合い、自分の「死」を自覚する事で自分の固有性を取り戻す事が出来、本来の自己の使命感を取り戻す事を論じてきた。

しかしながら、実存哲学の本来本元のドイツ・フランスにおいてもその様な考えを標榜することなく、経済至上主義の思想に終始している事を見る時、非常に残念に思う。

「今回のコロナ禍の中で、私はドイツ国民に外出等の制限の不自由をお願いしなければならない」と謝罪の気持ちを込めたメルケル首相の演説内容を多くの日本の政治評論家は褒め讃えた。最高権力者でありながら素直に謙虚な態度で国民に不自由を懇願する姿勢に好印象が持たれ、評価されたようだ。

確かにその演説内容は、コロナ禍における生活の外的要因の一つである「活」のあり方を説明したものである。しかし残念ながら、それに引き続き、前述のドイツ出身のM・ハイデガーの「死の先駆的決意性」の紹介にまで至らなかった事は残念であった。

ハイデガー哲学の一見、難解そうな概念を、この様なカタストロフの状況下でもし首相が紹介・説明していたら、ドイツ国民はその概念を熟慮する絶好のチャンスであり、「思想の日常化」ということを実現する事は言うに及ばず、多くの者は、今日の経済至上主義の価値観を見直し、現実生活の「生きる」から「生きる」への脱却を試み、近代社会を代表する思慮深い「哲学的な国民」に変容したものと確信する。

また、そのことは、フランスのマクロン大統領においても同様であった。

我が大学においては、本学の一年次の多くの学生が

「死」はまだ自分達の問題として捉え難いと言いながら、全員が毎日、必ずマスクを着用してキャンパスライフを送っていると言う事は、彼等は彼等なりに、無意識的にも「他者」のことを考えていると言う事であるに違いない。日本人は「主体性が足りない」と先進国から批判を受けるが、今回のパンデミックに際しては、学生達には特別な医学的・哲学的な見解は兎も角、この「和を以て貴しとなす」の国民性が幸いにも社会貢献として感染防止に役立っているという事は間違いない。

## VI. おわりに

本稿の「再校」に至る今日までの半年の間に、私の思想に「大きな変化」というより新しい発見が生じたので、最後にその事を明確に述べなければならないと思う。

本稿において、「人間は自らの死を自覚する事によって、これまでの生活が、不本意ながらも、周りに流された日常生活であった事を反省して、実存者と生まれ変わり、本来の自己の生き方を模索し始める者へ変わる」という事の主張を繰り返してきた。また私自身、人間とはその様な存在であるものと本稿を執筆しながらも信じてきた。

しかしながらこの半年間で学生を対象とした若者のみならず、先の大戦で当時「決して生き延びる事は出来ない」と思いながら、今日まで生き抜いて来られた高齢者の方々にも「死の先駆的決意性」の立場から、戦時中の事を改めて拝聴して分かった事がある。

それは、人間という存在は、身近に「死」と向き合う経験を何度重ねても、自ら積極的に客観的な思考でその「死」の現実を批判・判断すると言う行為を敢えてしなければ、ハイデガーの言う「死の先駆的決意性」と言う思想には自然には至らないものである。と言う事が分かった。換言すると、ただ身近に存在する「他者の死」を悲嘆するだけでは「死の先駆的決意性」と言う思想状況下に置かれているという事にはならないということである。その様な時に悲しい感情を抑えて「死」と言う観点から自己の人生を見直す作業を通し、命の有限性を敢えて認識し直す思考行動を為さなければ「本来の自己のあり方」を考えるという事にはならないのである。

「人生を幸福に生きる」と言う事は、ただ人生を経験するだけでは、不十分であり、その人生の経験に対して実存的分析を加えて「自己の本来あるべき人生」というものを自覚することによって、人生を幸福に生きるという事になるのではあるまいか。

今回の100年越しのグローバル的災厄（カタストロフ）に際して、全世界の人々が「人間本来の生き方に立ち回り」「各人の使命感を悟る」チャンスになる事を祈願するものである。